『高慢と偏見』に描かれる「ライブラリー」と「枠」――「読む」エリザベスの精神的成長との関連から――

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 泉, 順子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000133

『高慢と偏見』に描かれる「ライブラリー」と「枠」

――「読む」エリザベスの精神的成長との関連から――

泉　　順　子

はじめに

ジェイン・オースティン（Jane Austen）（1775-1817）が得意とする細部描写は『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*）（1813）についても批評家たちによって多角的に解釈されてきた。一例を挙げると，M. W. ブルーミット（M. W. Brumit）（2013）はこの作品に描かれるカードゲームに着目し，登場人物たちが好むゲームの特徴が，その人物の性格や言動に沿うように創作されていることを指摘している。ブルーミットの論考は，作中にさりげなく散りばめられた多くの要素がオースティンによって周到に用意されていたことを裏付けるだけなく，読者をいまなお惹きつけるこの作品の魅力には，当意即妙でウィットに富む会話や複層的なプロットに加え，細部にわたるきめ細かい描写があることも改めて感じさせる。

本論文では，ブルーミットのアプローチに沿うかたちで『高慢と偏見』に描かれる細部描写に注視し，なかでもエリザベス（Elizabeth）をはじめとする女性の登場人物たちの「読む」行為に関連する事物を拾い上げ，それらを 18 世紀から 19 世紀初頭のイギリスにみられた文化現象と絡めながら検討してみたい。オースティンの生きた時代は，礼儀作法を学ぶために他者の言動をつぶさに観察することや，良き伴侶を見つけるために異性の

心を読むことが奨励された。そして朗読のマナーについてもうるさい時代であった。小説が誕生し，紙の普及が進み，書簡が交わされ，貸し本屋が賑わいを見せる時代でもある。また，プライベートな空間を求める気持ちから邸宅の設計が改良され, 書斎とライブラリーが設けられた。さらには，枠で囲まれ規則性を重んじる庭からより「イギリスらしい」，自然に近い庭がつくられた時代でもあった。本論文では『高慢と偏見』に描かれる 3 つの「ライブラリー」（libraries）と，ダーシー（Darcy）がエリザベスに宛てた手紙，ペンバリー庭園（Pemberley Woods）そしてダーシーの肖像画に注目し，これらが先に述べたような文化現象を忠実に反映しつつも，エリザベスや妹のリディア（Lydia）の人柄を表す機能を果たしていること，さらに重要なことに，エリザベスの精神的成長の過程に欠かせない要素として用いられていること，そして「小説」というジャンルへの期待と挑戦が詰め込まれていることを指摘したい。

本論文ではまず始めに作中に描かれる 3 つのライブラリーを細かく検討し，物語で重要なテーマとなるベネット氏（Mr. Bennet）の家父長的態度の限界とその移行がライブラリーを通じて読み取れることを述べたい。次に，エリザベスの「読む力」が，その精神的成長と共に変化していくことを，ダーシーからの手紙，ペンバリーの庭園，ダーシーの肖像画との邂逅から変化していくことを述べる。手紙，庭園，肖像画は，どれもダーシーに関わるという共通点があるだけでなく,「枠」が設けられた中で作者（手紙の書き手，庭園の持ち主，肖像画の画家）が創作し表現したものであるという共通点もある。この枠の中に込められた作り手の意図や感性をエリザベスが自らの力で観察し，読み，解釈していくなかでこの物語のヒロインは自立していくのだが，それは自負心や思い込みに気づき，改めるだけではなく，新たに築いた人間関係を通じて社会との関わりを自覚し生きて

いくことを意味している。

1. 3つの「ライブラリー」

『高慢と偏見』では, 3種類の「ライブラリー」が描かれる。まず, ベネット氏のライブラリー，次にダーシーの邸宅にあるファミリー・ライブラリー，そして18世紀に流行した貸本屋（circulating library）である。それぞれのライブラリーと各々のライブラリーに関わる登場人物を検討する前に，当時のカントリーハウスにおけるライブラリーと書斎（study）のあらましを数点の文献から確認しておきたい。

王政復古の時期に王立協会の設立に伴い，ジェントリーに学問の気運が高まると，書物は私物として収集されるようになった。つまり，書物は専門家に限られた特別なものではなくなり，上流階級の日常生活にみられる一コマとなり，主人のみならず家族や客人とも共有するものとなった（杉恵 70）。そして段々と増えていく書物を保管する場所が求められるようになり，ライブラリーという空間がつくられた。ここには図書だけでなく，大陸ツアーから収集してきた彫像や絵画なども置かれ，ライブラリーは当主の教養と趣味を披露する部屋として位置付けられるようになるが，さらにその家の主人が読書をしたり，ものを書いたりする場として書斎も設置されるようになった。18世紀以降の貴族の邸宅には，この頃に芽生えたプライバシーの願望を反映して，個室が設けられるようになり，広いカントリーハウスではライブラリーと書斎のどちらも設置されていることが多い。主人にとって書斎は「教養と孤独の部屋」であり, 静寂とプライバシーを確保できるような位置に設けられていた（山田 181）。ここで過ごす意義は「イギリス紳士独特の虚栄と格式を見せるものではなく，教養と孤独の快感を得る」ことにあったという（山田 182）。その一方で, ライブラリー

では広い空間が確保され，図書だけでなく，彫刻や絵画も並べ，室内装飾も凝っており，客人をもてなせるような，他人の目を十分に意識した部屋となっている（山田 182）。しかも「その部屋が趣味よく装飾されていれば，ライブラリーこそ成金紳士を圧倒させる部屋となる。ホール，応接間，食堂といったものは，お金をかければそれなりのものはできるが，ライブラリーに見られる父祖伝来の家紋入りの蔵書は，振興成金に真似のできるものではない」ことから，ライブラリーは家主の教養だけでなく，格式と伝統を認識してもらう格好の場であった（山田 183）。

キャロル・シールズ（Carol Shields）とデアドリ・ル・フェイ（Deirdre Le Faye）によるジェイン・オースティンの伝記には，ジェインが読書家の父親のもとで幼少期から様々なジャンルの作品に触れ，そこからたくさんのことを吸収していたことが書かれてある。オースティン家のファミリー・ライブラリーの戸棚に並ぶ書籍数は 1801 年には実に 500 冊にものぼっていたようだ（ル・フェイ 106）。大人になってもジェインの読書への情熱は衰えず，残された彼女の書簡のなかで言及される作品は多岐にわたり，ボズウェル（James Boswell）（1740–1795）の『ヘブリディーズ諸島への旅』（*The Journal of a Tour to the Hebrides with Samuel Johnson, LL.D.*）（1757），ロバート・ドズリー（Robert Dodsley）（1704–1764）の詩，アン・グラント（Anne Grant）（1755–1838）の『アメリカの婦人』（*Memoires of an American Lady*）（1876），バイロン（George Gordon Byron）（1788–1824）の『海賊』（*The Corsair*）（1814）などなど，沢山の作品が登場する。手紙のなかでジェインは一読者としての率直な感想を綴っているが，知的好奇心を掻き立てさせないような作品，作品としてよく練られていない物語，翻訳が悪い作品などについてははっきりと批判している。読書と創作への強い思いは，オースティンの作品群にて関連のテーマや描写が再三扱われ

ることからもはっきりと見てとれよう。

さて『高慢と偏見』の幕開けの舞台は，ロングボーン（Longbourn）に住むベネット家のライブラリーである。ジェントリー階級のベネット氏のライブラリーは，カントリーハウスのような贅を尽くした雅なものに比べると小規模なもので，どちらかというと書斎（study）に近いようだ。世俗的な話題に終始し，感情の浮き沈みが激しい妻から逃げるかのようにベネット氏は一日の大半をこのライブラリーで過ごしている。ここはいわば彼の要塞ともいえる空間であり，例えばコリンズ（Collins）の来訪時には，この退屈で小心な牧師から一刻も早く解放されてライブラリーに戻りたいと願っているベネット氏の心境が “In his library he had been always sure of leisure and tranquility”（*Pride and Prejudice* 70）と説明されている。また，作品の後半に起きる三女のリディアの駆け落ち事件が一件落着すると，ベネット氏はさっそくライブラリーでの平穏な生活に戻れたことに安堵する。このようにベネット家のライブラリーは，ベネット氏が生活の大半を過ごすプライベートな空間として描かれているのだが，まさにこの当主とライブラリーの関係性がその後に起きる由々しき事態に少なからず影を落としているとすら言えるのである。

ベネット氏のライブラリーに収蔵されている図書についてはわずかな説明しか得られないのだが，その限られた情報をたよりに推察してみると，ベネット氏が資産を図書に投資していたことが読み取れる。というのも，ベネット家の財産をさりげなく，しかも抜け目なく下見するコリンズが，ベネット家の趣味のよい家財を褒め，さらにベネット氏のライブラリーではフォリオを手にする場面があるからだ。イアン・ワット（Ian Watt）の『小説の勃興』（*The Rise Of The Novel*）（2001）によれば，当時の平均的労働者の週給は 10 シリングで，小規模の店主や熟練された職人のそれは 1 ポ

ンドであったなか，紳士階級や裕福な商人のライブラリーにおかれる立派なフォリオ版は，1 冊 1 ギニー（21 シリング）ないしそれ以上であり，四六版のものは 1 シリングから 3 シリングであったという（ワット 55）。このような歴史的背景を踏まえてこの場面を読めば，ベネット家に収蔵されている「大きなフォリオ版」（“one of the largest folios in the collection”）（*Pride and Prejudice* 70）にわざわざ手を伸ばすコリンズの思惑が推察される。H・J・ジャクソン（H. J. Jackson）（2004）によれば，オースティンの作品が出版された頃の図書は “a sensible long-term investment” であり，値打ちが上がる新書は手頃な投資対象であったという（Jackson 4）。ちなみに，資産価値として扱われる図書については，ビングリー（Bingley）の妹キャロライン（Caroline）がダーシーの邸宅のライブラリーを褒めている場面であからさまに描かれている（*Pride and Prejudice* 38）。フォリオに限らず，ベネット氏のライブラリーに収蔵されている図書は，彼が投資し続けた一つの財産であり，そして当然のことながら，その愛着とおそらく執着から，この財産が誰に継承されるかということは，ベネット氏にとっては看過できない問題であることが推察される。ライブラリーとは彼の遺産が詰まった場所であるのだから，大切に集めてきた図書を然るべき人に受け継いでもらいたいという当主ベネット氏の願いがそこに厳然と存在するため，この家の法定相続人であるコリンズをライブラリーから追い出すきっかけをうかがうベネット氏には，この思慮に乏しい親戚に肩身を渡したくない，つまり継承者として認めたくないという不満すら見えてくる。

ところで，このライブラリーはベネット家の家父長的態度を象徴的に表す場でもある。それは先述のような，ライブラリーが当主の教養と趣味を客人に披露する場所であるからという理由だけではなく，この部屋でビングリーとダーシーが結婚の許可を仰いでいるからだ。もちろん，書斎やラ

イブラリーはもともとイギリスのカントリーハウスでは「男性の場」と目されてきたわけだから，自ずと家父長制を象徴する場所であろうことは理解できるものの，実際に物語でコリンズ氏の求婚を断ったエリザベスに憤慨したベネット夫人（Mrs. Bennet）が “I have done with you from this very day – I told you in the library, you know, that I should never speak to you again ….”（*Pride and Prejudice* 111）と語っているのは示唆的である。

とはいえ，多くの批評家が指摘してきたように，ベネット家の家父長的態度は表面的なものであり，実態はいろいろな面で形骸を晒している。ベネット氏が父親として，一家の主として十分に責務を果たしてきたかというと，そうともいえないのだ。そのためライブラリーは，家父長的態度の象徴よりも，むしろ父親としての責務に無関心なベネット氏の内面を象徴するものとして描かれている。ムリデゥラー・シャルマ（Mridula Sharma）はこの部屋が “a space of male intellectual rigor”（par. 6）であり，さらには長男の不在という負目を感じているかもしれない（そして不在になるかもしれないという可能性を見据えなかった）ベネット氏にとっては “a means to compensate for the absence of a son to inherit”（qtd. in Sharma, par. 6）であると論じている。またジャクソンはこの部屋を “a zone of mystery and, eventually, of guilt”（1）と論じている。キャサリン・ニュウイー（Katherine Newey）は世俗のことに疎く，男性らしい哲学や思想に浸り，日常生活の煩雑なことを処理できないベネット氏のライブラリーは “his haven of logic and order（for libraries are places with books in order）”（92）であると論じている。いかにも男性らしさを象徴するようなロジックと秩序の世界が，不条理で感情的な俗世界とは相容れないかのように，ベネット氏はライブラリーにこもり続ける。後にリディアやキティ（Kitty）の躾をろくにしなかったことが裏目に出て，ベネット氏は苦境に追い込まれ

ることになるのだが，結局はリディアの駆け落ちが他の男性たち，つまり義弟のガーディナー（Gardiner）とダーシーによって無事に処理されるというのも，ベネット氏の家父長的態度とこの家の将来が他の男性たちによって何とか支えられていくだろうことを仄めかしている。

ところで，ベネット家の評判を揺るがすような事件を起こすリディアは，貸本屋とともに描かれる登場人物だ。『高慢と偏見』では，貸本屋が作中で二度言及されており，興味深いことにどちらもリディアが関わっている。ひとつは，リディアがフォースター大佐（Colonel Forster）とカーター大尉（Captain Carter）がワトソン令嬢（Miss Watson）よりも「クラーク・ライブラリー（Clarke's Library）に立ち寄っている」（"very often standing in Clark's library）（*Pride and Prejudice* 30）という情報を母に伝える場面で，ペンギン版の注釈によれば，このクラーク・ライブラリーは個人経営の貸本屋であるという（*Pride and Prejudice* 386）。二つ目の場面は，物語の後半でブライトン（Brighton）に滞在中のリディアから送られてきた手紙をベネット夫人が読む場面だ（*Pride and Prejudice* 230）。オースティンは実体験や自分自身が見聞きしたことを忠実に描く作家であるので，『高慢と偏見』が出版された当時の貸本屋事情と絡めながら，これらの場面を検討してみたい。

1725 年にエディンバラ（Edinburgh）にて詩人のアラン・ラムゼー（Allan Ramsay）（1686-1758）が始めた貸本屋という経営方式は，1735 年頃までにはブリストル（Bristol），バーミンガム（Birmingham），バース（Bath）などの温泉・保養地と地方都市を中心に出現し，ロンドンには 1740 年頃に登場した（清水 77）。貸本屋では会員制が導入され，初期の利用者は主に教養のある上流・中流階級だったが，イギリス国内における読み書き能力の普及のみならず，紙の製造技術と印刷技術の向上も相まって，18 世

紀後半から 19 世紀には下層階級の利用者も増大した。1790 年から 1800 年にかけて全国に存在する貸本屋が 26 軒であったのに対し，1801 年には少なくともその数は 1000，1821 年には 1500 軒にまで伸びたという（清水 1996: 77-78）。飛躍的な店舗数の上昇を見るだけでも，その需要のほどが窺える。『高慢と偏見』が出版された 1813 年頃は，貸本屋の利用を占めていたのは上流・中流階級であったと推察される。

繁盛する貸本屋は増加する会員の知識欲に応えるために，実に多様な図書を並べていた。そのジャンルは古典，随筆，小説，詩集，歴史書，旅行書，そして新聞や流行の雑誌と幅広かったという（Gay 339）。とはいえ，この頃の紙は高額であったので，これだけの種類の図書を用意するには，それなりの資金が必要である。そこで当時の貸本屋の経営者たちは副業で儲けた利益を図書の購入にも充てることにした（清水 1994: 109）。ブライトンのような保養地や温泉では，女性の心をくすぐるような品々を扱っている貸本屋が多かったようで，そこでは宝石，額縁，楽器，陶磁器，香水などが陳列されていた（清水 1994: 108-9）。『高慢と偏見』にも “she had seen such beautiful ornaments as made her quite wild; that she had a new gown, or a new parasol, which she would have described more fully, ….（*Pride and Prejudice* 230）と書かれてあるように，貸本屋でのリディアのお目当ては本よりもパラソルやガウンなのだ。

ジェイン・オースティン自身も貸本屋の会員だった。正確には，彼女の母親が娘たちのために会員になってくれたようである。1798 年 12 月 18 日付けのジェインからキャサンドラ（Cassandra）宛の手紙には，貸本屋の営業を始めた隣人から入会の依頼があったことが伝えられていて，その店主がわざわざ「自分のお店には小説だけではなく，あらゆる種類の文学が置いてある云々と宣伝」していたことに触れ，ジェインは「うちの家族

に対しては見栄を張る必要もないのに。私たちは小説が大好きだし，そのことを恥じてもいませんから」（新井 73）と姉に伝えている。こうした言葉からも読み取れるように，貸本屋を経営する側と利用者側双方に，どこか遠慮がちな，世間の目を気にするような，真っ向から堂々と貸本に手を伸ばせない感覚があったようだ。

その最大の理由は，小説という新しいジャンルであった。貸本屋の経営に乗り出す女性がオースティン家にわざわざ「小説だけではなく，他のジャンルも置く」と断りを入れていること，そしてジェインが自分たちは小説好きであることを「恥じてない」と主張していることからも読み取れるように，貸本屋を巡る賛否両論の意見は，この小説というジャンルを中心に交わされていた。貸本屋を巡る否定的な見解の最たるものは，そこで得られる軽薄なロマンス小説だった。会員数を増やすために，貸本屋が中身のないロマンス小説を大量に生産していたことは忌々しき問題であった。1775 年に創設されたミネルヴァ・ライブラリー（Minerva Library）はその好例であった。当時この業界では最も成功した貸本屋であったが，儲けを得るために率先してセンセーショナルな軽い本を出していた。しかも貸本屋の棚に並ぶ良識に欠けた書物を出版していたのは経営者のウィリアム・レイン（William Lane）（c. 1745–1814）が経営するミネルヴァ・プレス（Minerva Press）であったために，同社は道徳的および教養的な観点から非難されがちであった（清水 77–8）。ドイツ出版史を研究するラインハルト・ヴィットマン（Reinhard Wittmann）によれば「都市部の兵隊が歩哨によって過ごす，長くて手持ちぶさたな時間は，彼らを読書へと駆り立てた。1780 年その光景は人を嘆かせもした。『大都市の銃兵に至るまで，哨舎に貸本屋の本を持ってきてもらっている』。駐屯地では小説の次には艶本，風刺冊子などが好まれた」（417）という。このように貸本屋は教養豊かで

知的好奇心に溢れる人々に便利な存在となったが，他方で風紀を乱す有害な場所として憂慮されてもいた。同様のことがイギリスでも見られ，『高慢と偏見』ではメリトン（Meryton）を頻繁に訪れては同地に駐留する軍人との出会いを期待するリディアによって，フォースター大佐とカーター大尉が貸本屋の常連であることが報告されている。これはつまり，女性を相手にする以上に性的に刺激的で面白い作品が彼らを虜にしていたのかもしれない，とも推察できるのではなかろうか。

『高慢と偏見』では，危機感のないリディアが貸本屋に通い，同じように軽薄な男性たちとそこで遭遇し，身を持ち崩すようなリスクが起きるかもしれないことも間接的に伝わってくる。リディアの手紙には，借りた本については一切言及されず，むしろ“such and such officers”（*Pride and Prejudice* 230）と男性に遭遇することに夢中であることが綴られる。つまり，知的好奇心に欠けたリディアにとって，貸本屋はあくまでも男性との出会いの場であったことがうかがえる。しかも保養地のブライトンにあるような貸本屋にはどちらかというと余暇を過ごす人々のために娯楽向けの本が陳列されていただろうから，そういった類いの本を借りる人々についても自ずと想像されるのだ。『高慢と偏見』では，リディアと貸本屋という組み合わせを通じて，感傷的で知性的とは言い難い，低俗な小説を次々に流していた貸本屋の思わしくない面が描かれている。

貸本屋の女性客に最も人気があったジャンルは小説であったと先に述べたように，18 世紀に生まれたこの新しい文学ジャンルについては，賛否両論の意見が飛び交い，その悪影響についての懸念は男性よりも，女性の方に向けられた。当時の男性識者たちは，女性が小説を読むと，架空の世界に浸ってしまい，気持ちが現実に向かわなくなり，家事や育児をおろそかにしがちだと憂慮した。また，ロマンスのヒロインに同化してしまうこ

とで，現実の結婚に向き合わずに，身の丈にあった相手を選ばなくなる，などとも言われた。スコットランドの哲学者・詩人のジェイムズ・ビアティ（James Beattie）（1735-1803）の『モラルと批評について』（*Dissertations Moral and Critical*）（1783）では，ロマンスの危険性が次のように述べられている。「ロマンスは危険な娯楽である…ひとの心を堕落させ，情熱を喚起させるにすぎない。こういったものの習慣的読書は歴史やその他多くの本質的な知識にたいする嫌悪感を育て，自然と真実から目を向けさせ，心を途方もない考えで満たし，しばしば犯罪的な性格を養うに至る」（清水 1994: 154）。小説のこのような一面をオースティンはリディアを通じて描いている。リディアが犯した伊達な男性との向こう見ずな駆け落ち事件は，おそらく，当時流行したロマンス小説の模倣であろうことが推察される。そんな彼女が求めたものは，シャーロット（Charlotte）とは対照的に，地に足をつけた現実的な結婚生活ではなく，スリリングで良識に欠けた男女の戯れにすぎない。

このように問題視された小説の影響力は，ベネット家では，娘たちの教育に無関心なベネット氏ではなく，継嗣相続者としてのコリンズによって危惧される。夕食後に応接間で朗読を頼まれたコリンズがその本をはねつけ，代わりの本を提示する場面は，以下のように描かれている。

> Mr. Collins readily assented, and a book was produced; but on beholding it, (for every thing announced it to be from a circulating library,) he started back, and begging pardon, protested that he never read novels. –Kitty stared at him, and Lydia exclaimed. –Other books were produced, and after some deliberation he chose Fordyce's Sermons. Lydia gaped as he opened the volume, and before he had, with very monotonous solem-

nity, read three pages, she interrupted him ....（*Pride and Prejudice* 67）

コリンズは手渡された本を，二つの点から拒絶する。まずひとつは，その本が貸本屋からのものであること，もうひとつはそれが小説であるという理由からだ。ここでコリンズは差し出された本の代わりにジェームズ・フォーダイス（James Fordyce）（1720-1796）の著作を提案する。フォーダイスは 18 世紀のイギリスにおいて，子女たちに向けた説教集の著者として名高く，彼は女性が小説を読むことに難色を示した知識人の一人であった。ジャクリーン・ピアソン（Jacqueline Pearson）によれば，Fordyce の *Sermons to Young Women*（1765） は “a ‘grammar’ of female subjectivity, constructing a ‘new kind of woman’, a ‘domestic woman’ whose image naturalized female ‘propriety’, modesty and self-denial” として高く評価されていたという（Pearson 47）。しかも，“Fordyce contents himself that their chief ‘business’ is not to read books but ‘to read Men, in order to make yourselves agreeable and useful’”（Pearson 43）ということを鑑みれば，フォーダイスの著作を意図的に選択したコリンズの心意が明確に読み取れるのではないだろうか。即ち，女性は小説を読む暇があれば，男性の心，ひいては伴侶の想いをきちんと汲み取り，対応できるように努力すべきである，ということ。そして女性には，謙遜の心を忘れず，家長を支えるように心がけるべきであるという考えであり，その期待を（この時点では未来の妻として期待されている）ベネット家の娘たちに表明しているのだ。

さらに注目したいのは，フォーダイスの説教集を読もうとしたコリンズを遮るような非礼を取るのがリディアであるということだ。ここは後の駆け落ち事件の伏線として描かれていると読み取れる。若い軍人たちとの戯れに夢を馳せるリディアの無節操な生活態度が，ここでは実父のベネット

氏ではなくコリンズによって指摘されているということは，ベネット家の法的な後継者であるコリンズがフォーダイスの説教集を読もうと希望することによってこの家の家父長制を継承したいという彼の意志が間接的に示され，そしてそれを結局娘たちの手によって拒絶されることにより，この家の継承がうまくいかないであろうことが，この場面で象徴的に描かれている。若き女性たちに説教をするはずの父親の役目をコリンズが果たそうとする直前に，リディアという，後に家父長的態度の欠落によって生じる不祥事を嫌というほどベネット氏に思い知らす人物が，コリンズの朗読を拒絶するのである。そして最後に明らかにされるように，このリディアが駆け落ちした際に，娘を探しにロンドンに赴いたベネット氏の試みは徒労に終わり，この一件はガーディナーとダーシーによって何とか解決されることとなる。

新井英夫（2014）は『高慢と偏見』における家父長的態度が父親のベネット氏からダーシーへと受け継がれていることを指摘しているが，このことは物語で随所に示されている。とはいえ，それは必ずしも両者が相似していることにはならない。むしろオースティンはライブラリーの描写を通じて，ベネット氏とダーシーの違いを浮き彫りにし，エリザベスが最終的に親元から離れ，ダーシーとの結婚を選択すること自体に，新しい価値観を加えた精神的成熟が見られることを示しているのだ。

ベネット氏とダーシー氏のライブラリーの使用は，どちらもこの時代の生活習慣に則して描かれているにもかかわらず，対照的である。先述のように，18 世紀になるとイギリスのカントリー・ハウスの設計には「個室」並びに「プライバシー」という概念が反映されるようになったが，ベネット氏はそんな願望をまさに象徴する人物で，彼はライブラリーの空間を独占し，できる限り他者の侵入を防ごうとする。しかもこうして何かとプラ

イベートな時空間を求めがちな父親は，社会との隔絶を求めているようにすら見受けられる。そして先にも述べたように，ベネット家のライブラリーの後継者はおらず，ベネット氏の代で閉じられ，次世代への継承は途絶えるのだ。他方で，ダーシーのライブラリーは祖先との絆，継続性，そして家族の絆，そして公共の精神も象徴する。物語の中でダーシーが “[It] has been the work of many generations”（*Pride and Prejudice* 38）と述べているように，ペンバリーの図書コレクションは代々大切に受け継がれてきたもので，彼にとってライブラリーとは先祖からの絆として大切にされるべきものであるのだ。さらに，ダーシーは “I cannot comprehend the neglect of a family library in such days as these”（*Pride and Prejudice* 38）と話し，人々が家庭の団欒としてのライブラリーを大切にしない最近の風潮を嘆いている。マーク・ジルアード（Mark Girouard）によれば 18 世紀末にはライブラリーは “family living rooms” として使用されることが多くなり，楽しく遊べるようなカードや科学的な玩具なども置かれていたようだ（Girouard 180）。1750 年代の大きなカントリーハウスでは，ライブラリーは家族がくつろぎ楽しめる場所として機能し，書斎は “the personal sanctums of their owners, continued to exist as well as libraries of common resort” として区別されていたという（Girouard 180）。グランドツアーから収集してきた彫刻や絵画，家族の肖像画などを展示するギャラリーもこの頃になると新たに設置されるようになり，この頃の間取りの変化は “to destroy the balance of the formal house and bring about its replacement by new types of planning”（Girouard 180）を促していく。物語におけるダーシーのライブラリーは，こうして過去と現在（そして未来）の継続性，家族の絆と愛情が象徴的に示されている。

ところで，父親としてのベネット氏はとかく批判の対象になりがちであ

るが，むしろそれを肯定的に捉えたメアリー・バーガン（Mary Burgan）の次のような解釈は興味深い。この時代に求められた理想的な「父性」に対する「報復」（“retaliation”）として，ベネット氏はライブラリーに引きこもるのだという（Burgan 343）。さらに興味深いのは，このベネット氏の期待外れの父性がなければ，エリザベスとダーシーは結びつかなかっただろうという彼女の考察だ。

> The deficiencies of Mr. Bennet, ... force the daughters into increasing reliance upon their own wills. They must disengage themselves from the family hierarchy in order to survive. The fact they marry men who have an independence based on personal competence indicates that their resolutions of the novels maintain an idea of authority, but it also shows the search in Jane Austen's novels for a more responsible and human source of order to recreate the social possibilities betrayed by the elders.”（Burgan 354-5）

プライバシー，つまり個人の時空間を大切にする父親は，結果として娘たちにも「個」の自立を促したとバーガンは論じる。そして父権に象徴されるような「権威」に怯むことなく，自分の道を進む強さが娘たちに備わったというのである。実際に，エリザベスに芽生えつつある自立心と好奇心は，悪天候のなかでも歩くことを厭わないと主張する彼女の次のような言葉—— “I do not wish to avoid the walk. The distance is nothing, when one has a motive; only three miles”（*Pride and Prejudice* 33）——にはっきりと表れている。多少の困難をものともせず，雨の中で牧草地を横切り，衣服が汚れても平気な顔をし，「運動の熱気で紅潮した頬」（“face glowing with the

warmth of exercise”）（*Pride and Prejudice* 33）を誇らしげに見せるエリザベスに，ダーシーは魅せられる。人と人，階級間の「距離」（“the distance”）を本人の意志で乗り越えていこうとするエリザベスの力強さにダーシーが感受したものは，彼のように富を蓄え，力をつけつつある裕福な市民階級の原動力に通じるものなのではないだろうか。

2. 3つの「枠」の中を読み込むエリザベス—手紙，庭園，肖像画

この物語は，「人間観察」に秀でていることを自負するエリザベスの視点から主に描かれている。鋭い観察力でもってエリザベスは姉のジェインとビングリーが相思相愛であることにいち早く気づき，ダーシーの高慢で無愛想な態度に敏感に反応し，ビングリー姉妹の虚栄心に苛立つ。時には退屈なほど平穏なロングボーンにある日突然現れ，ベネット家の人々の日常を揺さぶり始める訪問者たち（ビングリーとその姉妹，ダーシー，コリンズ，ウィッカム（Wickham）など）の言動はエリザベスの感性豊かな観察眼を通じて，ひとつひとつ見極められていく。

様々な事件と人間模様が主にこのエリザベスの視点を通じて説明されるため，読者は当然のことながら彼女を通じて繰り広げられる物語の世界を理解していくのだが，物語が進展するにつれ，読者にはこのエリザベスの鑑識力がいささか不確かであることに気付かされる。その最たる例が，ダーシーの想いに全く気づいていないエリザベスであろう。読者はかなり早い段階からダーシーがエリザベスに惹かれていることを知らされるため，エリザベスの「読み違い」を意識しながら読み進めることになる。しかも彼女の「読み違い」にうすうす気づいているのは，読者に限らない。エリザベスの周囲の人間も然りで，一例を挙げてみると，恭しく “you were a studier of character” とビングリーに声をかけられたエリザベスが気をよく

して “I understand you perfectly” と自信ありげに応答する場面がある。ここでビングリーが “I wish I might take this for a compliment; but to be so easily seen through I am afraid is pitiful”（*Pride and Prejudice* 42）と述べているのは，物事の裏を詮索しない楽観さを度々友人から揶揄われるビングリーですら，エリザベスの観察力の危うさをより現実的に捉えていることを暗示しているのではないだろうか。実際，エリザベスは親友のシャーロットがコリンズとの結婚を目論んでいたとは露程も思わず，しかもダーシーとウィッカムの関係についてもとんだ誤解をし続ける。ジェイン（Jane）とビングリーの婚約を一日も早く進めるべきだと気遣うシャーロットのアドバイスを一笑に付し，姉については誰よりも自分がよく心得ていると言い張るエリザベスの人間観察は，結局のところ説得力をもたない。そして，この物語のなかでエリザベスの思い上がりをはっきりと指し示すのは親でも姉妹でも友人でもなく，ダーシーなのである。エリザベスが “And your defect is a propensity to hate every body” とダーシーを酷評すると，彼もすかさず “And yours is wilfully to misunderstand them”（*Pride and Prejudice* 57）と返し，さらに二人が踊りながら話す場面でも “*You* think it a faithful portrait undoubtedly”（*Pride and Prejudice* 92）と率直に諭すのだ。エリザベスが歪んだ「肖像画」を勝手に描き，その虚像に固執しているだけであること，さらには “... I could wish, Miss Bennet, that you were not to sketch my character at the present moment, as there is reason to fear that the performance would reflect no credit on either”（*Pride and Prejudice* 92）と述べ，エリザベスの観察は表面的な仕草や会話にとどまっていることまで指摘する。

いうまでもなく，作品のメイン・プロットとなるダーシーとエリザベスのロマンスは，エリザベスが自らの「読み違い」に気づき，反省し，修正

する過程と並走するのだが，エリザベスがダーシーを理解していく過程で非常に重要な場面が3つある。それは，ダーシーからの手紙を読み，ペンバリーの庭園を見学し，そしてダーシーの肖像画を目にする場面だ。どれもエリザベスがダーシーの人となりを理解する手掛かりとなり，これにより彼女はこれまで気づかなかったダーシーの面を発見し，彼に対して思慕の念を抱くようになる。しかもこの3点にはどれも「枠」という共通点があり，その縁取られた枠のなかに表現されるもの，つまり言葉や趣向，風景，絵をエリザベスが自らの力で読むという点でも通じている。表面にとどまっていた彼女の観察力に思慮深さが加わり，彼女の精神的成熟に導く重要な過程であることはもちろんのこと，最終的に彼女の自立を促すきっかけを生む大事な節目となっている。

一向に耳を傾けないエリザベスにダーシーは手紙という手段をとる。ウィッカムと自分の確執について，ウィッカムの調子の良い話をすっかり信じ込んでいるエリザベスに実情を理解してもらうために，ダーシーは手紙をしたため，エリザベスに聞かせるのではなく，「読ませる」という手段を選択する。この選択は，意識的にせよ無意識的にせよ，読書を愛する父の「いちばんのお気に入りの娘」であり，カード・ゲームに興ずるよりも静かに本を読むことを好むことを冷やかされるような（*Pride and Prejudice* 37）エリザベスに備わった「読む」力にダーシーが賭けたとも解釈できよう。

さて手紙に書かれている内容は主に2つに分かれ，前半は彼がビングリーとジェインの交際に危機感を抱いた理由が綴られている。そして後半はダーシーの妹ジョージアナ（Georgiana）がウィッカムに騙され，危うく評判を落とすところであったというミス・ダーシーの，そしてダーシー家にとっての黒歴史が告白される。手紙の前半がエリザベスにとっては相当

に現実的で耳の痛いことが書かれてあるのに対し，後半はあたかも当時流行していたセンチメンタルな小説に見られるような，現実のこととは到底思えないエピソードが明かされており，ダーシーの手紙は対照的な題材によって構成されている。

このダーシーからの手紙を読むエリザベスの心を鷲掴みにしたのは後半のエピソードだ。金銭目的から，まだ若干 15 歳で世間を知らないジョージアナを誘惑したウィッカムの巧みな話術と策略に気付き，間一髪で妹を救出した兄の物語は，この当時流行したセンチメンタルな感傷小説の世界さながらである。フィクションのような事件が綴られる手紙を夢中になって読み通したエリザベスには言葉にならない感情がほとばしり，“Astonishment, apprehension, and even horror”（*Pride and Prejudice* 198）とあるように，驚愕と昂奮が錯綜する。そして知ってしまったダーシー家の忌まわしい事件について，いまや彼女が自負する理性もどこかに置き忘れ，“This must be false!”, “This cannot be! This must be the grossest falsehood!”（*Pride and Prejudice* 199）と何度も昂る感情を抑えられずに呟くのだった。

ここで終われば，手紙の読者のエリザベスはセンチメンタルな小説の一読者に過ぎないのだが，ダーシーの手紙の効力はそのあとに発揮される。エリザベスは何度も丁寧に読み返し，感情を抑えて，「一つ一つの文の意味」（“the meaning of every sentence”）（199）を解釈しようと試みる。そして自分がこれまで自負してきた観察力が認めたはずのウィッカムの言動を一つ一つ思い出しながら，そこに本質的な問題，つまり “integrity” とか，“benevolence”，“substantial good” というものが全然見つけられないことに気付くのである。それだけではなく，ダーシーについても “unprincipled, unjust, irreligious, immoral” という面がもはや見出せないことにも気づかされるのである（*Pride and Prejudice* 201）。エリザベスの発見は『高慢と

偏見』の後半にて描かれる地主としてのダーシーの評判につながるのだが，この時点でのエリザベスは手紙を何度も読み返すうちに“... she bad been blind, partial, prejudiced, absurd”（*Pride and Prejudice* 201），“How humiliating is this discovery!”（*Pride and Prejudice* 202）と，これまでの自分の至らなさをまず認識することになる。

ところで，18 世紀のイギリスにおける書簡の流行を忠実に描くオースティンは『高慢と偏見』で手紙を何度も登場させるが，作中での手紙の読み方は二通り，つまり独りで黙読する手紙と，家族と一緒に朗読する手紙とに書き分けられている。オースティンの時代に生きた人々がもちはじめたプライバシーを優先した読み方と，家族や仲間をつなぐための読み方がそれぞれ描かれているのだ。アビゲイル・ウィリアムズ（Abigail Williams）が克明に記述しているように，18 世紀の人々は朗読の技術を磨くことに熱心だった。また，ラインハルト・ヴィットマンが述べるように，朗読という行為は人と人とを結びつける，社交的な手段であった（427）。『高慢と偏見』においても，手紙を読むという行為はベネット家のひとびとが事件や情報を共有するための媒介となっている。他方で，ダーシーからの手紙を，誰にも邪魔されないように戸外で独り読み，その内容を他言しないまま過ごすエリザベスの決心には精神的自立が芽生えつつあると解釈できる。自身の観察力に限界があったことを思い知り，これまできちんと「見えていなかった」および「読めていなかった」ことを省みる彼女が，さらにこの手紙の内容を一切口外しないと決めるのは，これまで生きてきた共同体から別離する決意が彼女に生まれていると解釈できるからだ。先述のように，手紙を朗読するという行為が，情報の共有を目的とし，家族という一つの共同体の結束を裏付けるものであるとするならば，エリサベスの孤立と隠し事は，彼女が近いうちに生まれ育った家から離れるであろ

うことを，この時点ですでに暗示している。実際，この手紙を読み終えてからのエリザベスは家族，とりわけ父親に対しても，距離を置いて観察するようになっていく。

エリザベスがダーシーとの結婚を想像し始める転機は，彼女がペンバリーを観光目的で叔父夫妻と訪れた時である。この場面を再びエリザベスの「読み」という観点から検討してみると，手紙を読む場面との繋がりが見えてくる。エリザベスの目を通じて，ペンバリーの敷地内に広がる庭園が広大で，地形も変化に富んでいること，それに丘や谷，曲がりくねる道があり，川が流れ，そこでは釣りもできることが説明されている。眼前に広がる壮大な景色に心を奪われるエリザベスは，“She had never seen a place for which nature had done more, or where natural beauty had been so little counteracted by an awkward taste” と描かれる（*Pride and Prejudice* 235）。そして屋敷の調度品についても “... it was neither gaudy nor uselessly fine, with less splendor, and more real elegance, than the furniture of Rosings”（*Pride and Prejudice* 236）とエリザベスは観察し，当主の趣味の良さに「真の気品」（real elegance）を感じ取る。

自身の見聞を創作に活かしたオースティンは，エリザベスの目を通じてペンバリーの庭園が 18 世紀に流行したイギリス式庭園であることを伝えており，この点はしばしば識者に指摘されている通りだ。開かれた庭，変化や起伏に富む景色，森，川といった要素と配置は，これまでのフランス式整形庭園から「より自然らしい」景色を求めたイギリス式庭園の特徴だ。イギリスでは 18 世紀には整形式幾何学庭園が飽きられてきて，その結果としてこれまで庭を秩序付けていた「規則性」が捨て去られ，整形式庭園の囲いは撤廃され，外へ広げられた森や谷間を含む敷地の全体がパークとして整備されるようになった（中尾 113）。なお旧式のヨーロッパの庭園

に見られるような垣根がイギリス式庭園では撤廃されたが，野性の動物や部外者の侵入を防ぐために「ハハア」（“ha-ha”）と呼ばれる空壕が境域として設けられていた。

オースティンの弟ヘンリー（Henry）の回顧によれば「非常に幼い頃から彼女はピクチャレスク（picturesque）について書いたギルピン（William Gilpin）（1724-1804）に心を奪われていた」という（ル・フェイ 106）。だが『高慢と偏見』のダーシーの庭からはピクチャレスクの要素はさほど見つからない。むしろ，“Its banks were neither formal, nor falsely adorned”（*Pride and Prejudice* 235）とあるように，エリザベスがこの庭にとりわけ注目したのはむしろ「形式」にも「過度な装飾」にもとらわれないダーシーの「より自然体」の庭であったのである。当時流行していたピクチャレスクの庭園にしばしば見られたに「過度な自然」すらなく，「人工的なところがない」（“...without any artificial appearance”）（*Pride and Prejudice* 235）ことも殊更に強調されていることから読み取れるように，ダーシーの庭は，美しいことはもとより，人間が手を加えたことを鑑賞するものに感じさせない「自然」を作ったという点で完璧なのである。それはエリザベスが夢みた湖水地方の自然に匹敵する美しさだ。

庭に込められた彼の美意識と感性を通じて，エリザベスはダーシーの人物像に修正を施す必要があることに気づかされる。「形式」にこだわる，四角四面な男性像から，過度な自然を見せて見栄を張らない素朴さと，装飾をそぎ落として本質だけを大切にする人物像が，丹精込めて改良した庭からみえてきたことが，エリザベスを結婚へと向かわせたのではないだろうか。紙面に綴られたダーシーの想いを何度も読み返し，彼の言葉を彼女なりに解釈するのと同様に，人間の手によって囲い込まれた庭園という空間の中に広がる当主の趣向を反映した理想的な風景はダーシーの人となり

を理解する手掛かりを彼女に与え，エリザベスは初めて，自分がこの地で暮らしてみたいという願望を抱くようになる。

さらに作中では，もう一つの「枠」としてダーシーの肖像画が登場する。額縁に収められたダーシーの肖像画を前にして，エリザベスは彼の優しい眼差しに気付き，“more gentle sensation towards the original”（*Pride and Prejudice* 240）を感受する。そして“[H]ow many people's happiness were in his guardianship!”，“How much of pleasure or pain it was in his power to bestow!”（*Pride and Prejudice* 240）と，地主としてのダーシーの支援のもとに多くの人々が生きていることを改めて認識するのである。そこからエリザベスには彼に対して「感謝の念」（“a deeper sentiment of gratitude”）までもが湧き起こる。この心境の変化は，いうまでもなく，彼女自身が描いていたダーシーの「肖像画」（“portrait”）が，ダーシーがかつて指摘したように，歪んでいたことを認知するのと同義であろう。ヴィヴィアン・ジョーンズ（Vivien Jones）の注釈によれば，この感謝の念は，この時代の女性たちの愛情表現の基盤となっていたというので（*Pride and Prejudice* 396），ここでエリザベスの心境に決定的な変化が起きていることが分かる。

エリザベスが肖像画を鑑賞する場面で強調されているのは，地元の人々の生活に手を差し伸べる地主としてのダーシーの慈善と公共の精神である。杉恵淳宏が指摘するように，カントリーハウスは「アイデンティティと永続性の象徴」（杉恵 23）であり，「かつてはコミュニティの結束の象徴であった。オーナーは公へ奉仕し，学校や教会を建ててその地域を支配し，仕事と慈善を提供した」（杉恵 25）。ここでは貴族ではないけれど，地主としてコミュニティに奉仕するダーシーの一面が強調されている。彼の使用人が “He is the best landlord, and the best master that ever lived. Not

like the wild young men now-a-days, who think of nothing but themselves" (*Pride and Prejudice* 239) と敬愛するダーシーの姿は，ライブラリーでひたすらプライバシーを求めるベネット氏とは対照的ではないだろうか。この肖像画の場面からは，ダーシーとの結婚によりエリザベスの精神的な成熟が育まれていくことが期待されていることが読み取れる。それは自負心や思い込みを省みるだけでなく，新しい家族との生活を通じて社会との関わりを自覚し生きていくことをも意味している。

おわりに

舞踏会でダーシーがエリザベスに "What think you of books?" と持ち掛けると，エリザベスが赤面し "Books — Oh! no. I am sure we never read the same, or not with the same feelings." (*Pride and Prejudice* 92) と戸惑い，話題を変える場面がある。常に強気な姿勢をダーシーに見せてきたエリザベスが赤面するという珍しい場面だ。なぜエリザベスは赤面したのだろうか，という疑問についてニュウイーは，ダーシーに知られたくない一面をのぞかれてしまうことをエリザベスが恐れたのだと解釈する (93)。つまり，読んでいる本を人に打ち明けるということは，自身を曝け出すことになりかねず，教養豊かなダーシーに対してエリザベスはどうにか面子を保ちたかったのだというのである。

この指摘は，エリザベスの内にある「枠」を連想させて興味深い。溌溂と活発に動き回る，感受性豊かなエリザベスは自負する観察力でもって周囲の環境や人々を見つめているものの，これは裏を返せば彼女がベネット家のなかで最も世間体，つまり表層を気にしている人物であることを表しているとも言えるのだ。実際に，人前で無遠慮に振る舞う自分の家族を見て，赤面するのはエリザベスだけであり，父や妹たちは一向にマイペース

な態度を崩さず，他人の視線に頓着しない。阿部公彦が指摘するように，『高慢と偏見』が礼節や体裁を大変重んじる時代に生まれた「徹底して瑣末な『表層』にこだわる」作品であるならば（阿部 45），この瑣末な表層に誰よりも敏感なのがエリザベスなのだ。彼女は，周囲の人々の表面的な仕草や言動にこだわるがあまり，そこに注意を向けてしまい，なかなか自分の内面に向き合う余裕がないようにすら見受けられる。また，常に物事を前向きに見つめ “Let me take it in the best light”（*Pride and Prejudice* 135）と考えるジェインの性格を半ば羨みつつ，エリザベスは “There are few people whom I really love, and still fewer of whom I think well. The more I see of the world, the more am I dissatisfied with it; and everyday confirms my belief of the inconsistency of all human characters, and of the little dependence that can be placed on the appearance of either merit or sense”（*Pride and Prejudice* 133）と述べ，なかなか素直に人を好きになれないことを告白する。ここはジェインの秘めた強さと，エリザベスの脆さが描かれる興味深い場面なのだが，一見快活に思われがちなエリザベスが心の内では周囲との高い壁を築き，境域を設け，自らを枠に押し込めていることが明かされており，この点で本論が注目した「枠」の表象とつながってくる重要な場面ともいえる。「本について語ろう」と言われて尻込みし，自らを曝け出すことを躊躇し，自身を枠から解放する勇気がなかったエリザベスは，手紙，肖像画，庭園という縁取られたものの中に込められた発想，表現，感性などを読み込むことで，新たな人間関係とその世界に加わり，これまでの価値観を再構築することが期待されている。

中尾真里の『英国式庭園』（1999）によれば，18 世紀にみられたイギリス式庭園の発展の背景にはこの時代に「ホイッグ」と呼ばれた振興の地主や貴族たちの活力があったという（119）。都市で財を蓄え，田舎に土地を

買い，地主階級に組み込まれていった彼らは，「進取の気性，リベラル，経済優先，微妙で繊細な美よりも壮大で豪胆な美を好み，見晴らしの良い，自然な美しさ，合理性を重んじた」（中尾 119）。『高慢と偏見』のダーシーもその一人であることはいうまでもない。先述にあるように，ダーシーがエリザベスの美しい瞳から感受したのは，距離や垣根を越えて進む力強さ，自然で率直な感情表現と，同時に感情を抑えて解釈する理性と合理性である。オースティンは彼らの力強さを肯定的に捉え，そこにイギリス社会の未来と希望を重ね合わせた。その意味では，描かれた貸本屋も同様なのではないだろうか。貸本屋という文化的・経済的現象は新しい大衆文化の台頭の象徴であり，「読者（金持ち，中流，商店主，召使）共通の文学的関心と同一の社会的価値観を持ち，この種の共通の文化と文学的階級意識の希薄化はこの国をいわば社会的・政治的に一体化させるきっかけになり得た」（清水 1996: 92）からだ。この作品ではリディアだけではないベネット家の娘たちが（そしてオースティン自身が）貸本屋の利用者であったという点で，前向きに捉えられているのだとも考えられる。ムリドゥラー・シャーマ（Mridula Sharma）がいみじくも “*Pride and Prejudice* reviews our approach toward examining marginalized spaces and interrogates all critical attempts to quantify and compare the degree of discrimination faced by characters belonging to different class and gender constructs”（par. 31）と指摘するように，『高慢と偏見』では個々の場所で，個々の体験をする人々が行き来し，すれ違い，あるいは手と手を取りながら集合体を形成し，既存の枠や構図のみならず世界観を再構築していく様子が，小説という人間観察に秀でた新しいジャンルを通して描かれている。

＜引用文献＞

Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. 1813. London: Penguin, 2014.

Brumit, Matt. W. "'[T]hey both like Vingt-un better than Commerce': Characterization and Card Games in *Prde and Prejudice*." *Persuasions* (online) V. 34, No. 1 (Winter 2013) Jane Austen Society of North America. 18 pars. https://jasna.org/persuasions/on-line/vol34no1/brumit.html. Accessed 1 July 2023.

Burgan, Mary A. "Mr Bennet and the Failures of Fatherhood in Jane Austen's Novels" 341-56. Littlewood, Ian, ed. *Jane Austen: Critical Assessments*. Vol. III. East Sussex: Helm Information, 1998.

Pearson, Jacqueline. *Women's Reading in Britain 1750-1835*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Gay, Penny. "Pastimes." Todd, pp. 337-345.

Grey, J. David, et. al. editors. *The Jane Austen Companion*. New York: Macmillan, 1986.

Girouard, Mark. *Life in the English Country House*. Harmondsworth: Penguin, 1980.

Hunt, John Dixon. "The Picturesque." Grey, pp. 326-329.

Jackson, H. J. "What Was Mr. Bennet Doing in his Library, and What Does it Matter?" *Romantic Libraries* (Feb. 2004) Romantic Circles. https://romantic-circles.org/person/hj-jackson. Accessed 1 July 2023.

Jones, Vivien. Notes. *Pride and Prejudice*. 1813. London: Penguin, 2014. 377-400.

Lamont, Claire. "Domestic Architecture." Todd, pp. 225-233.

Littlewood, Ian, ed. *Jane Austen: Critical Assessments*. Vol. III. East Sussex. Helm Information, 1998.

Newey, Katherine. "'What think you of books?': Reading in *Pride and Prejudice*." S*ydney Studies*, vol. 21, 1995, pp. 81-94.

Richardson, Alan. "Reading Practices." Todd, pp. 397-405.

Sharma, Mridula. "New Masculinities, Old Conventions: Gender Divisions and Representations in *Pride and Prejudice*." *Persuasions* (online) V. 41, No. 2 (Summer 2021) Jane Austen Society of North America. https://jasna.org/publications-2/persuasions-online/volume-41-no-2/sharma/. Accessed 1 July 2023.

Todd, Janet, et. al. editors. *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

Williams, Abigail. *The Social Life of Books*. New Haven: Yale UP, 2017.

Wiltshire, John. *Jane Austen: Introduction and Interventions*. New York: Palgrave Macmillan, 2006.

阿部公彦『善意と悪意の英文学史』東京大学出版会，2015 年。

新井英夫「『高慢と偏見』にみるパターナリズム――ベネット氏からダーシーに受け継がれるエリザベスの教育――」『松山大学論集』第 26 巻第 3 号, 2014 年 8 月, 117-142 頁。

新井潤美編訳『ジェイン・オースティンの手紙』岩波書店，2004 年。
ラインハルト・ヴィットマン「十八世紀末に読書革命は起こったか」ロジャ・シャルティエ，グリエルモ・カヴァッロ編『読むことの歴史―ヨーロッパ読書史』大修館，2000 年，407-444 頁。
清水一嘉「貸本屋と大衆読者」松村昌家・川本静子・長島伸一・村岡健次編『英国文化の世紀 4　民衆の文化誌』研究社，1996 年，71-95 頁。
清水一嘉『イギリスの貸本文化』図書出版社，1994 年。
キャロル・シールズ『ジェイン・オースティンの生涯』内田能嗣・惣谷美智子監訳，世界思想社，2009 年。
杉恵淳宏「カントリー・ハウスと室内空間―ジェイン・オースティンの館に触れて」久守和子・中川僚子編著『＜インテリア＞で読むイギリス小説』ミネルヴァ書房，2003 年，21-46 頁。
中尾真里『英国式庭園』講談社，1999 年。
山田勝『イギリス貴族』創元社，1999 年。
ディアドリ・ル・フェイ『ジェイン・オースティン　家族の記録』内田能嗣・惣谷美智子監訳，彩流社，2019 年。
イアン・ワット『小説の勃興』藤田永祐訳，南雲堂，2007 年。